

○濱口 奈津圭 氏（平成 13 年（当時 7 歳）、父を交通事故で失う）

〔要旨〕

当時の状況と感情について

「お父さんです。交通事故に遭いました」。最後に父から聞いた言葉です。

留守番電話から確かにその言葉を聞いたのですが、後で確認すると、そんなメッセージは入っていませんでした。少し不思議な出来事でした。

私は小学 1 年生で、父親の顔を見たのは病院で、すでに亡くなった後でした。

父親を亡くし、母親の地元・香川県に引っ越しました。転校先の先生から、「お父さんが交通事故で亡くなった、かわいそうな子なんだよ。優しくしてあげてね。」とクラスメートに紹介されました。その時初めて、「私は、かわいそうな子なんだ」と思いました。自分では思ってもみなかったのですが、先生にそう言われたことで、「そうなんだ」と思いました。

同級生との会話の中で父親の話になると、「あ、お父さん、いないんだよね。ごめんね。」と悪気なく謝られるのです。私もみんなの家族の話を知りたいのに、その話になると、遠慮されたり謝られたりすることがすごくつらくて、感情を殺すことはこんなにもつらいんだと思いました。全然悲しい気持ちにはなっていないよと言っても、「そんなことないでしょ」と言われます。そのように自分の気持ちを勝手に決めつけられることも嫌でした。

助けとなった周囲のサポート

そんな中で、私は多くの方々に助けていただきました。

一つは、NASVA 友の会への参加です。同じ境遇の方々と交流することができたので、私一人が悲しいんじゃないというのを感じました。小学生の時は、毎年夏休みに旅行に連れて行ってもらいました。父親がいないことで経済的に旅行などできないと思っていたので、同じ年の子や同じ境遇の子たちとの交流をメインとした旅行がとても楽しみでした。

また、毎年冬には交通遺児のコンテストがあります。書道や絵画や写真などいろいろな分野に参加することができ、賞もいただけることが一つの励みになりました。夏は旅行を楽しんで、冬はコンテストを頑張ってという 2 つの目標があることで、1 年 1 年良い思い出作りができました。

2 つ目に、毎年、県の交通安全課より図書カードをいただきました。中学、高校と学年が上がるにつれて、辞書や参考書など必要なものが増える中、この図書カードのお陰で無理のない範囲で購入でき、勉強に集中することができました。

そして 3 つ目が、交通遺児育英会の「あしながおじさん」です。高校、大学と無利子の奨学金を借りることができたため、大学に進学し、研究に集中することができました。

違う立場の遺族の話を聴き、成長することができた

高校2年生の時、交通遺児育英会の集まりに参加しました。今まで、香川県の交通遺児と交流することはあったのですが、全国からの集まりは初めてで、こんなにもたくさんの交通遺児の高校生がいるということを知りました。

その時のプログラムの中で、ご主人を亡くされた方のお話を聴きました。その方が、これからどう生きていけば良いか分からなくて苦しんだこと、離婚して離れる離別と死別は違うということをお話されました。また、死人に口なしで、どんな事故でなぜ死んでしまったのか分からないままであるということをお話されました。

当時は、母や家族のことを気にしたことはなかったのですが、初めて別の立場の方の意見を聴き、それから自然と周囲の細かい感情の変化に気付くようになりました。人として成長できた集まりだったと、今になって思います。

勇気を出して助けを求めてください

社会人になって、学生時代を振り返ってみると、幼い時は感情の整理がすごく難しく、気にしないようにしてもどうしてもつらい気持ちが前に出てきて、ふいに涙が出たりすることがとても多かったように思います。ですが、自分の未来を変えるのは自分しかいないと思うので、つらい気持ちを自分で乗り越える力は必要だと思っています。

私は、交通事故で父親を亡くしたのが一番悲しかったことですが、人それぞれ、一番つらい経験はあると思います。私は、悲しい時は音楽を聞いて心を支えています。そんな中で、好きなアーティストの言葉があります。「過去を愛して、今、息していこうよ」。過去を悲しむばかりではなく、愛するほど受け入れることで、前を向いて生きていけるのではないかと思います。

今もし、交通遺児で苦しんでいる方がいたら、勇気を出して一言助けを求めてください。家族、友人、機関など、必ず助けてくれる人が周りにはいます。ネットで検索することでも、調べてみたら救われるということもあるので、どうぞ、探してみてください。